

知的障害を伴う肢体不自由児に対する各教科の指導Ⅱ

企画者 下山 直人（筑波大学附属桐が丘特別支援学校）
司会者 小山 信博（筑波大学附属桐が丘特別支援学校）
話題提供者 野崎 美咲（筑波大学附属桐が丘特別支援学校）
成田 美恵子（筑波大学附属桐が丘特別支援学校）
指定討論者 川間 健之介（筑波大学人間系）
KEY WORDS: 重複障害児 各教科 観点別学習状況の評価

【企画趣旨】

平成 29 年の学習指導要領改訂では、育成を目指す資質・能力が明確化され、その確実な習得が求められた。重複障害者等に対する指導においても、各教科等を取り扱うことが前提であることが改めて示され、各教科等の指導の充実が求められている。

そこで、筑波大学附属桐が丘特別支援学校では、特別支援学校肢体不自由教育校長会の加盟校を対象に、昨年、知的障害を伴う肢体不自由児の各教科の指導の実態と困難さに関する調査を行った。その結果、各教科の指導においては、実際に指導を担当する教員が目標設定や単元計画の作成、観点別学習状況の評価等に困難さを抱えている現状があることが分かった。

こうした状況を踏まえ、知的障害を伴う肢体不自由児を対象とし、各教科で育成を目指す資質・能力を育む指導の在り方を検討したい。（下山 直人）

【話題提供者の趣旨】

（1）各教科の資質・能力を育む単元の開発

昨年、当校では、全国特別支援学校肢体不自由教育校長会の加盟校を対象に、教科指導を行う際に実態把握や指導目標・指導内容の設定に参考としている資料や、実際の指導における困難さ等についてアンケートを実施した。その結果、調査に回答した教師の半数以上が「教科の個別の指導計画の目標を設定すること」や「単元に合わせた教材教具を用意すること」、「3 観点を踏まえて評価規準・評価基準を設定すること」等に困っているということが明らかになった。また、教科指導の充実のためには、「教科指導の拠り所となる資料や研修等を充実させること」について「とてもそう思う」と答えた人が 52.2%、「ややそう思う」と答えた人が 45.1%となり、教科指導の参考となる資料や研修等の充実が求められていることも明らかになった。

そこで、当校では、各教科で育成を目指す資質・能力を育む指導の在り方について、参考となり得るモデルケースを単元として開発し、提供する必要があると考えた。各教科の単元開発の過程を、①知的障害を伴う肢体不自由児を対象に、各教科で育成を目指す資質・能力や各教科の見方・考え方の捉え直し、②観点別学習状況の評価による個々の児童生徒の学習状況の把握、③各教科で育成を目指す資質・能力の生活場面における具体化、④単元の指導目標・指導内容の設定、⑤教材の選定・指導の仕掛けの設定、⑥観点別学習状況の評価を踏まえた指導改善として整理し、単元の開発に取り組んだ。特に③の「各教科で育成を目指す資質・能力の生活場面における具体化」により、各教科で育成を目指す資質・能力との関連で指導の重点を明確にすることができた。一方で、観点別学習状況の評価においては、評価の各観点の趣旨の理解や各観点と児童生徒の姿を具体的に照らし合わせて捉えることには課題が残る、評

価と指導が結び付いた効果的な指導をさらに追及することに課題が残った。（野崎 美咲）

（2）指導実践

知的障害を伴う肢体不自由児を対象とした国語科、音楽科、体育・保健体育科の授業実践を報告する。

国語科においては、小学部第 4 学年の児童 3 名を対象に、単元「紙芝居を作ろう」を開発した。学習履歴や日常生活の様子及び当校が再整理した「国語科の資質・能力の捉え」、「知的国語科の重点的に指導する内容の流れ図」等を踏まえ、特別支援学校小学部・中学部学習評価参考資料の示す小学部国語科 2 段階の評価の趣旨に沿って児童 3 名の実態を捉えた。そこで、前述③を「扱われる言葉を自分の中にある言葉と照合したり、当てはめたりすることを通して確かなものになっている姿」「感じたことや考えたことを、身近な人に思わず言葉を介してたくさん人とやり取りしている姿」と導き出した。児童らは読み聞かせを基に話の筋を理解した上で登場人物の台詞を再考し、普段からなじみのある語句に言い替えることができた。また、話の筋に沿って自分らを登場させるストーリーを考え出し、主体的に物語に向き合うこともできた。指導においては、国語科の見方・考え方及び 3 観点を常に意識した授業作りをすることで、児童が発する言葉を価値付けることができたり、国語科以外でどのように言葉を用いているのかを注意深く捉えたりすることができた。しかしながら、観点別学習状況の評価を行う際の評価の場面や方法については引き続き検証を深める必要がある。

その他、音楽科、体育・保健体育科についても実践を報告する。（成田 美恵子、野崎 美咲）

【指定討論者の趣旨】

子供たちがこれからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うと同時に、評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、授業の改善と評価の改善を両輪として行っていく必要がある。桐が丘の今回の取組を通して、教科指導における指導と評価の一体化について議論を深めたい。（川間 健之介）

【文献】

文部科学省（2018）特別支援学校小学校・中学校学習指導要領解説 総則編。

(SHIMOYAMA Naoto, KOYAMA Nobuhiro, NOZAKI Misaki, NARITA Mieko, KAWAMA Kennosuke)